

もう呼ぶことはない「お母さん」 (年取るとのこと日誌から)

CL教育研究会 遠間美保子
amhotm@gmail.com <http://docl.jp>



2012/06/01

冬が長く春も気温が低かったせいかな頃になって鶯の鳴き声を耳にする。朝6時半、寺院奥の高い樹木に囲まれた宝物殿の前で体操をしていると美しい声で歌い始めた。姿は見えないが向かいの荒行堂の屋根に止まって啼いているよう。飛んでいる姿もないのに、少しはなれた木々の間からも聞こえる。歌が重なっていないので、これまで、てっきり一羽の鶯と思っていたが、二羽が交互にそれぞれの場所から代わりばんこに相手に何かを伝えるために、鳴き声をいろいろと変化させて歌っている。ただ声をだすのではなく、相手の歌が一声終わるまでだまって聞いてから、考えながら、答えて歌っている。人間は考えなしにただ、べらべらと相手かまわずしゃべる声を周りで耳にする。レイノルズ先生が「言葉は贈り物」と言っているように、相手にプレゼントとなるよう考えて、だいじなことを伝えていくよう心掛けたいが…。事実の鶯が先生。

6/03

朝六時半、人通りはほとんどない。近くの神社が緑でこんもりと覆われていいなあと思ひながら、門前にさしかかると、社殿に掛かっている鈴の音が元気良く「ガランガラン」と聞こえてきた。境内をのぞくと、消防隊員らしき青い作業着を着た男性四人が参詣をして談笑しながら仕事場に向かうのか、歩き去った。神様への祈りが生活と仕事に結びついている日本の文化は穏やかな心を育てているに違いない。雨模様だが、清々しい朝。

2012/06/15

朝、5時40分仕事場に向かう30代男性が駅方向に歩いていく。左手にコーヒー缶を持って、右手でタバコをもみ消している。早朝出勤の彼のモーニングなのだろうか。吸殻入りの空き缶をどこに捨てるのだろうか。駅に着くまでの自動販売機のそばに備わったゴミ入れに捨てるのかもしれない。再生される時、タバコの吸殻をうまく取り除く装置があるのだろうかと一瞬考えた。ともかく、その男性は道端に空き缶と吸殻を投げ捨てなかったのは良かった。彼の毎朝のモーニング習慣なのかもしれない。お勤めごころうさま。

2012/06/17

参道の茶屋で火をつけてもらったお線香を手を高齢の婦人が寺院の境内を墓地の方に左に折れていった。後ろから「お母さん」と呼び止める中年女性の声が透き通るように耳に入った。母が11年前、姑が昨年に亡くなって、以来「お母さん」と声に出して呼ぶことがなくなった。温かく、優しい、懐かしい響きが甦った。会話で「母」と声にだすが、自分が死ぬまで「お母さん」と呼ぶことはない。毎日心の中で拝んだり、おやすみなさいを声なしでよぶだけ。温かい寂しさがそっと湧いた。

7/6

ウォーキング中珍しい、へーと感心した光景

1. 70歳前後の恰幅の良い男性が、若者が自転車を漕ぐように、座席に座らず立ったままペダルに足を乗せ、長い昇り坂道を右に左に体を傾け軽やかに漕ぎ去った。
2. 後ろからサーッと風を切る音がして振り返る間もなく、金髪の長い髪を風になびかせ、透ける薄い生地で濃い肌色のマントのようなブラウスを翻して、若い女性が自転車で走り去った。
3. 寺院の大きな池いっばいに大蓮の花が満開を迎え見事に咲き誇っている。柵から池の水面を覗くと、

よく見かける赤とんぼとは違って、鮮やかな真紅で尾っぽの幅が平たく太いトンボの番いがあちらへこちらへと飛び回っている。これも見事な自然の傑作。

7/10

夏の蒸し暑さが始まった早朝、茶色の三毛猫がアスファルトの上に、前足を前で組むようにして、首をもたげ、それ以外はゆったりと後ろ足を投げ出し寛いでいる。ウォーキングで通り過ぎるこちらに顔を向け、『この蒸し暑いのに、暖かいのを好む猫の私でさえ、朝の涼しいうちに、アスファルトで体を冷やしているというのに、人間さまは努力が好きだねー』と呟いているよう。目が合うと、『おや、聞こえたのかい』とばかり、ぴくっと右耳だけ反応させた。

8/09

この時期では珍しく気温と湿度が低くなり、北海道の夏のようにウォーキングにはもってこいの天気。日傘をさした中高年の二人の婦人の会話。

Aさん「あそこのあれ、知ってる？」

Bさん「あそこって？」

A「ほら、あっちの方の」

B「どこの？」

A[すしやで、行ったことない？]

B[すしやさん…]

A[ほら、きよろし街道のところのせんべいやさんの近くで名前は…]

B[交差点のせんべいやさんの向かい？]

A「交差点から右にずっと入ったとこの、名前が出てこない…」

B[すしやさんでしょ？]

A[あそこはけっこうおいしいらしいわ]

Bさんはきよろし街道がどこかわかってない様子で二人の話し合うすし店は一致していないように伺える。でも、この二人のはっきりしない記憶に基づく会話は、ゆっくりとした歩調に合って、一つの話題がのぼっているように、うまくかみ合っていて流れていた。

9/13

朝6時頃、寺院境内奥の小さな祠前の階段を長身の僧侶が上がってくる。大きなスチールの柵に体をくぐらせ両手で抱えて、この先の本堂に運ぶのだろう。見たところ20代の前半で僧侶になりたての風情。袴をつけない真っ白の僧衣だけを着流しているが、荒行で鍛えた逞しそうな腕と背筋がすっと立ち、きりりとした顔つきをして今で言う「イケメン」に近い。私の姿を認めて、爽やかな透き通る声で、「おはようございます」と挨拶してくれた。境内でこちらから僧侶に挨拶をすることはあるが、向こうからされたことは今までにあつたかどうか。私にとっては、早朝から若い僧侶から挨拶を受けて、こんなにラッキーな朝はない。今日一日中ついている気分だ。感情も事実のひとつ。事実が教えてくれる「なすべきこと」お賽銭十円でお参りした。

10/6

道路に面した一軒家の玄関前に所狭しと樹木や草花が生い茂っている。一人が枝葉を避けながら出入りするすき間があるだけで、藤棚、琵琶、あじさい、萩、南天とそれぞれの木が伐られることなく自由にはびこっている。樹木の幹を草花がびっしりと覆って、四季折々にいろいろな種類の花が咲き、見つけるのが楽しみなお庭だ。二回のベランダにはまだ、朝顔が咲いていて、秋の水引きや紫式部、軒下には外来種のペコニアやペチニアの鉢が3つぶら下がっている。15年以上この庭をのぞきこんで拝見しているが、住人にお目にかかったことはない。ところが今朝は女性が水遣りをしている。挨拶をして花見を楽しませていただいているお礼を言うと、きちんとお化粧をした60代のその女性にはにこにこ笑顔で応じて、互いに二言三言言葉を交わしていると、車が近づいてくることを教えてくれる。「ごめんください」と失礼すると後ろから「お気をつけてー」と声を掛けてくれる。継続は有り難い。

(千葉県市川市CLインストラクター)

 [目次へ戻る](#)